

2021年12月5日 礼拝説教要旨

詩編講解説教88「御子はこの暗闇の地に」

詩編88：2～8、マタイ2：16～18

詩編第88編は、嘆きの詩編に分類されます。嘆きの詩編自体は、詩編においては決してめずらしいものではありません。むしろ分類においては一番多いものです。けれどもこの第88編は多くの嘆きの詩編の中でも際立って一つの大きな特徴があります。それはこの詩編にはまったく慰めとなる言葉、希望となる言葉が見当たらないということであり、初めから終わりまで一貫して悲嘆に満ちています。最後「今、わたしに親しいのは暗闇だけです」（19節）という言葉でこの詩編は閉じられますが、原文では最後の言葉がこの「暗闇」という言葉なのです。暗闇、絶望の中で終わるのです。それゆえ本来は希望によって結ばれた最後の部分が欠落してしまったのではないかと推測する学者たちもいるくらいです。

この詩人はどうも若い時から病を得ており、しかも非常に深刻な状況にあるということが分かります。「わたしの魂は苦難を味わい尽くし、命は陰府にのぞんでいます。穴に下る者のうちに数えられ、力を失った者とされ、汚れた者と見なされ、死人のうちに放たれて、墓に横たわる者となりました。あなたはこのような者に心を留められません。彼らは御手から切り離されています。あなたは地の底の穴にわたしを置かれます。影に閉ざされた所、暗闇の地に（4～7節）ここにある「陰府」「穴」「墓」「地の底の穴」「影に閉ざされた所」「暗闇の地」これらの言葉が指しているのはいずれも死の世界です。詩人はその病ゆえに死を意識しているのでしょうか。それゆえ「今は、死を待ちます」（16節）とさえ言います。

さらにその病によってあらゆる交わりから切り離され、この人は孤独の状態にあります。おそらく人々から忌み嫌われ、隔離される必要のあった病気でしょうか。当時であれば重い皮膚病がその対象になります。「汚れた者と見なされ、死人のうちに放たれて、墓に横たわる者となりました。あなたはこのような者に心を留められません。彼らは御手から切り離されています」（6節）つまり御心にとめられない、神さまからも見捨てられ、切り離されている状態です。また「あなたはわたしから親しい者を遠ざけられました」（9節）ともあります。ここでは人間同士の交わり、親しい者たちからも捨てられている。神さまからも、親しい者たちからも見捨てられるという二重の苦しみがあります。あらゆる交わりを断たれ、一人孤独に耐える。それはまさに絶望の極みといってもよいでしょう。そしてそこには何の解決も、何の慰めの言葉もなく、暗闇の中でこの詩編は終わるのです。

この詩編第88編は、このような講解説教をしない限り、おそらく好んで読まれることはないでしょう。多くの人々は、この詩編を読んで疑問に思うかもしれません。なぜ聖書なのに、慰め、希望の言葉がないのか。でもそこにはすでに一つの先入観があります。わたしたちは慰めになる言葉、救いの言葉を聖書にいつも期待しています。でもそのようにして自分に心地よい言葉だけを抜き読みしているのではないのでしょうか。それでは聖書の伝えようとしている福音の本当の光を見逃してしまうこととなります。この詩編は、人生の中で味わう絶望を深く見つめる中でこそ見えてくる福音の本当の光をわたしたちに見せる御言葉であります。

人は、本当に深い嘆きにある時というのは、人のどんな慰めの言葉も入って来ません。その痛みにも誰も立ち入ることができないことを無意識のうちに知っています。ヨブ記で試練にあった

ヨブのところには三人の友人が来て慰めようとしています。でも結果としてそれは慰めにはなりません。かえってヨブを追い詰め、苦しめるものになりました。それは人間が真にその嘆き、痛み、に共感することができない存在であることを示しています。皆さんも、誰かを励まそう、慰めようと言葉を探すけれども、どんな言葉も虚しく響くように思える経験はないでしょうか。わたしも牧師として様々な人の痛みや苦しみに寄り添う時に、自分の無力さを突きつけられて愕然とする経験をいたします。そこでは人間のどんな言葉も、相槌さえも力にはならない。人は相手の相槌さえ気に触るのです。わかったようなふりをするな。この苦しみは誰もわからない。その通りなのです。誰もその嘆きに真に共感することはできません。

詩編88編は、どこまでもその嘆きに寄り添います。無理に慰めたり、無理に答えようとしません。むしろ嘆きに徹する。その嘆きを嘆きとして重んじる。そのようにして嘆きに寄り添うのです。嘆き、悲しみをなかつたかのように覆い隠したり、楽観主義で乗り切ることが聖書の信仰ではありません。またいくら合理的な理由づけがなされても、論理的に説明できたとしても、そこには何の慰めがあるのでしょうか。わたしたちはそんなことを聞きたくはないのです。答えなんか聞きたくない。苦しい時は苦しい、悲しい時は悲しい。ただそれだけなのです。それ以上でも、それ以下でもない。この詩編はそういうわたしたちの心境をよくわかっています。人生に起きる問題に答えがないことをよくわかっている。そうでしょう。どんなに考えても答えなど出ないのです。ある牧師は言います。「これは答えなき世界に生きる者の祈りだ」と。

それなら救いはないではないか。そうではありません。そこでこそ見える光がある。この答えなき世界、「わたしに親しいのは暗闇だけ」のこの世界にイエス・キリストは来てくださいました。何も起こらず、何も変わらず、何も解決せず、何の希望も答えもない。この暗闇の地にイエス・キリストは来てくださった。それがクリスマスです。今日はマタイ福音書のところを読みました。クリスマスの物語の一つですが、ヘロデによる幼児虐殺の話です。「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子どものことで泣き、慰めてもらおうともしない、子どもたちがもういないから」(マタイ2:18)

我が子を殺された母親の嘆きを想像することができますか。「慰めてもらおうともしない、子どもたちがもういないから」こういう嘆きの言葉をわたしたちもどこかで聞いたことがあります。理不尽な形で我が子を失った親がいます。たとえ犯人が有罪になったとしても、裁判で勝ったとしても、だからと言っていなくなった我が子が帰ってくることはない。そこには何の慰めも、答えもない。ただ暗闇があるだけです。

しかし教会はイエス・キリストが陰府に降られたと告白します。この暗闇の地に、何の答えも見出せないような地に、そして深い陰府の只中にまで神の御子イエス・キリストは入って来られた。それはわたしたちが絶望の中で、このような嘆きの詩を口にし、哀しみに留まる時、神さまに見捨てられ、答えのない沈黙の内に十字架につけられ、死にて葬られたイエス・キリストをそこに見いだすことができるためです。絶望の果てに光を見る。それはこの暗闇の地にお生まれになられたイエス・キリストによって可能になります。